



# あしべ屋妹背別荘



## 「和歌の浦」の魅力

和歌の浦の海岸には島々や丘陵が、広い干潟と細く伸びた砂嘴とともに見られ、自然の景観が繊細に重ね合わされている様子は古代から褒め称えられてきました。特に724(神亀元)年、聖武天皇が行幸された折には改めてその価値が目ざされ、この時に山部赤人が詠んだ短歌「若の浦に 潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして 鶴鳴き渡る」によりこの地は、都に住まう上流階級の者たちの憧憬の場となりました。

詩に詠まれただけでなく、干潟に連なる島々の輪郭や松の風情ある姿などは昔より絵図に繰り返し描かれ、歴史の流れの中で、美しいこの自然の景色をどのようにあらわそうとしたのか、足跡を辿ることができます。

江戸時代に入ると、初代紀州藩主の徳川頼宣が大規模な整備をおこない、父・家康を祀る東照宮を造営、また妹背山には母のために多宝塔を建立しました。石造の三断橋や観海閣を建てたのも頼宣の功績です。

この地は、地域住民によって自主的に保護がなされてきた瞳目すべき長い経緯があり、多数の人々による願いが実を結び、2010(平成22)年8月に和歌の浦は国の名勝に指定されました。

## あしべ(芦辺)屋と朝日屋の消長

頼宣はまた、三断橋の陸地側のたもとに2軒の茶屋を並んで建てたようです。これがあしべ屋と朝日屋で、ともに最初は粗末な小屋でしたが、あしべ屋はその後、旅館を営むようになり、明治時代の初期には木造2階建てを構えました。他方、朝日屋は衰退し、あしべ屋に吸収されたようです。明治20年代の中頃までにあしべ屋本店は木造3階建てとなり、隣地には別館を増築し、興隆をきわめました。

当時、和歌祭は非常に活気があり、大勢の観光客を集めました。あしべ屋の主人・藪清一郎は、1893(明治26)年にあしべ屋の広告冊子「紀伊和歌浦図」を刊行し、和歌祭に関して紙数を多く用いて丁寧に紹介しています。療養としての海水浴への勧誘と、海水を沸かした潮湯(汐湯)の医療も強調されました。

あしべ屋本店は明治時代末期に、全面的に改築されたと考えられます。ですが時代は変転し、観光客は新和歌浦へと流れ始めていました。あしべ屋は1925(大正14)年に廃業し、後発の旅館であった望海楼に買い取られます。その後、望海楼も潰えました。

かつての記憶をとどめるために、「芦辺屋・朝日屋跡と鏡山」は2008(平成20)年6月に県の名勝・史跡に指定されています。



梅戸在貞と思われる壁貼付絵

\*2014年4月西本撮



2013年9月21日作成 2017年2月8日改訂: 西本直子

写真: 中島悠二

## あしべ屋妹背別荘

明治時代のあしべ屋には文化人が多数訪れ、文字に残しました。南方熊楠と孫文がこの旅館で1901（明治34）年に再会し、旧交を温めたこと、また1911（明治44）年に夏目漱石が和歌山での講演会のためにあしべ屋の別荘を予約していたことなどは良く知られています。

小泉信三は父とともに、この旅館に1889（明治22）年頃、長逗留しました。新島襄・八重夫妻も療養の目的で1877（明治10）年に和歌の浦を訪れていますが、当時の旅館はあしべ屋以外に見当たらなかったはずです。田山花袋は、あしべ屋と思しき建物を夜に見た印象を1899（明治32）年に書き残しています。さらに、坪内逍遙があしべ屋に泊まったらしい痕跡も疑われます。

あしべ屋には本店の他に別荘が複数設けられていましたので、誰がどこに泊まったのかという詳細を突き止めるのは困難ですが、けれどもこのうち、妹背山に設けられた別荘（妹背別荘）は明治期後半では貴賓館と呼ばれたことは重要です。皇族がお休み処として訪れ、これを祝してあしべ屋の主人・藪清一郎は記念碑を1905（明治38）年に立てました。

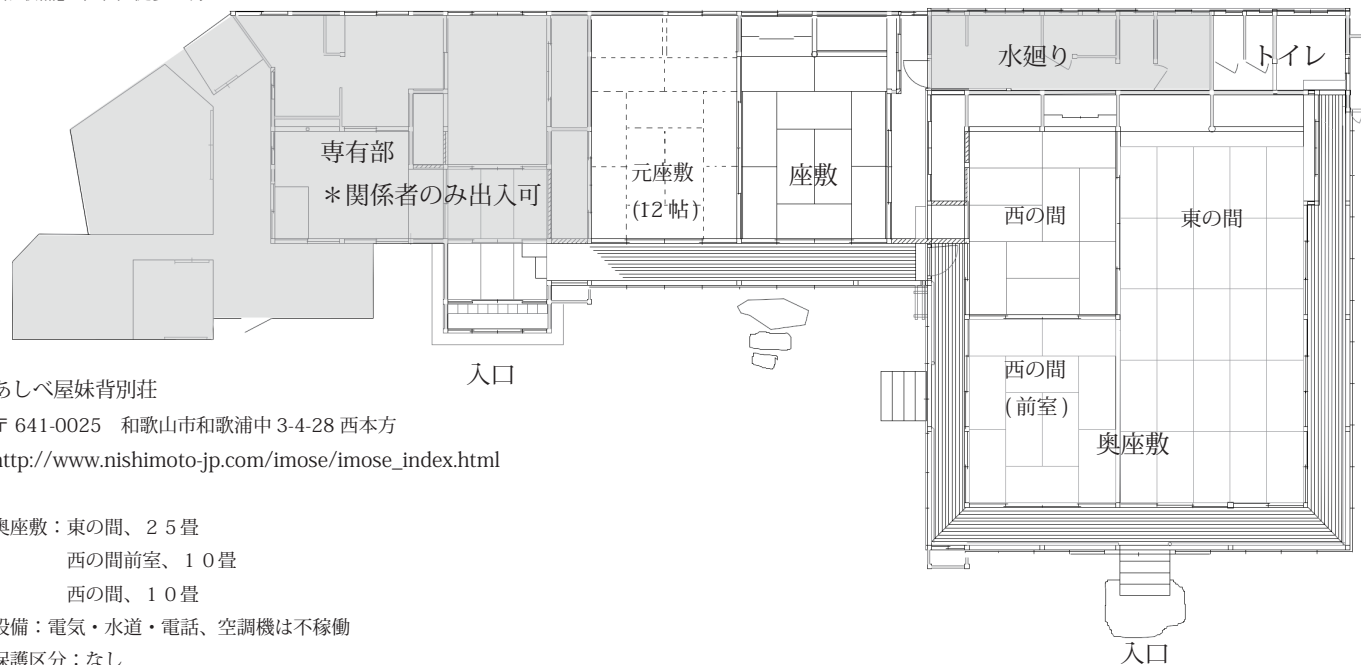


アクセス:

JR 和歌山駅、南海電鉄和歌山市駅より  
タクシーで25分

和歌山バス・「玉津島神社前」下車、  
徒歩2分、

「和歌浦」下車、徒歩8分



あしべ屋妹背別荘

〒641-0025 和歌山市和歌浦中3-4-28 西本方

[http://www.nishimoto-jp.com/imose/imose\\_index.html](http://www.nishimoto-jp.com/imose/imose_index.html)

奥座敷：東の間、25畳

西の間前室、10畳

西の間、10畳

設備：電気・水道・電話、空調機は不稼働

保護区分：なし

駐車場：県営駐車場利用

問い合わせ：kronosclear@gmail.com



浜口弥「新和歌浦と和歌浦」（1919 [大正8]年）に掲載されたあしべ屋の広告には、「妹背山麓弊館妹背別荘は幽遠閑雅にして長くも明治三十六年十月九日今上天皇陛下の御幸臨あらせられしを始め奉り各皇族宮殿下御成の光栄を担へるは皆此別荘に御座候」と記されており、おそらく最上の客の逗留のために用意された施設であったと思われます。ここにはビリヤード場が付設されていた時期もありました。

妹背別荘はその後、大正時代末期のあしべ屋の廃業とともに、地元で建設業を営んでいた西本健次郎へ譲渡され、しばらく別荘として用いられた後、坐禅道場として30年以上貸し出されました。当該地域における2010（平成22）年の国名勝の指定などに伴い、現在では最も成果が期待される活用方法の模索が始められています。

あしべ屋の本店や、他の別館などが失われてしまった今、ほとんど唯一残された貴重な妹背別荘を後世に残し、伝えていくことが強く望まれています。

<謝辞>

文面作成に当たり、額田雅裕・藤本清二郎・米田頼司各先生からの貴重な御教示を参考とした。厚く御礼申し上げます。

